

12.

『高師小僧』もうひとつの古代製鉄の原料？ 知ってしまか??

愛知県豊橋市高師が原台地に『高師小僧』を訪ねて 2003.11.12.



高師小僧と豊橋市街の南 渥美半島の付け根に広がる高師が原台地

豊橋市の海岸に近い台地 高師が原では 今も雨の後 表面の土が流されると
 「高師小僧」と呼ばれる無数の小さな棒状の鉄の塊が
 頭を出し、立ち並んでいる……という

また、東海・信州地方では
 この「高師小僧」を砂鉄に替わる製鉄原料とした
 「たたら製鉄」が古来より存在したのではないか……という

『高師小僧』もう一つの古代製鉄原料？ 知っていますか？

【 内 容 】



1. 「高師小僧」 概要
2. 「高師小僧」を 豊橋 高師台に訪ねて
 - 2.1. 豊橋市立地下資源館
 - 2.2. 高師が原 Walk
3. 「高師小僧」の走査電子顕微鏡 拡大写真
 *** 豊橋の片目神伝説 ***
4. 豊橋のむかし話「野依の神様」
5. 「高師小僧」総括

12. 1. 「高師小僧」 概 要



私が「高師小僧」を知ったのは鉄鋼協会の名古屋シンポジウムで

「東海・三河地方では、ごく少数のたたら製鉄遺跡しかまだ見つかっておらず、大規模な和鉄精錬はなかったと考えられている。
しかし、この地方に豊富に存在する『鬼板』や『高師小僧』を製鉄原料として古代製鉄があったのではないかと・・・」

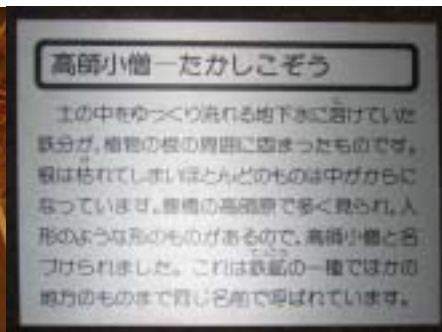
と論議されているのを読んで。

また 姫路のK氏のホームページで 美濃関市の大野刀匠が鉄の品位の低いこの鬼板や美濃金生山の赤鉄鉱を原料に使用して『たたら』製鉄で精錬に成功され、刀を製作されている事も知りました。

参考 日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学部会
2000 年度秋季シンポジウム論文集
「本州中央部における鉄文化の展開」



渥美半島の付け根にあたる豊橋周辺は、中央構造線が走る地下資源豊富な土地でその海岸近傍に広がる広大な湿地には色々な養分と共に鉄などの金属成分も流れ込み、豊富な養分を好む葦原が広がっていた。その湿地に溶けていた鉄分が他の養分と共に葦の根に吸い寄せられた。そして、それらの葦の根を中心にその周りに何十年もかかって水酸化鉄として析出成長を繰り返した。長さ・太さ数十センチに及ぶ大きいものから数センチのものまで無数に棒状に析出成長し、土と一緒にうずもれている。



「高師小僧」の標本



「鬼板」の標本

豊橋市地下資源館 展示より 2003.11.12.

その後、隆起して台地となったこの高師が原や野依・天伯が原台地で 雨によって表面の土が洗い流されると、昔 無数の葦の根の周りに析出していた棒状の鉄が、まるで小僧が立ち並ぶがごとく 無数に頭を現す。この葦の根の周りに成長した棒状の鉄をこの地の名を取って『高師小僧』と呼ばれる。これらの『高師小僧』が無数に埋まっている高師が原 高師台中学周辺は県指定の天然記念物に指定されている。

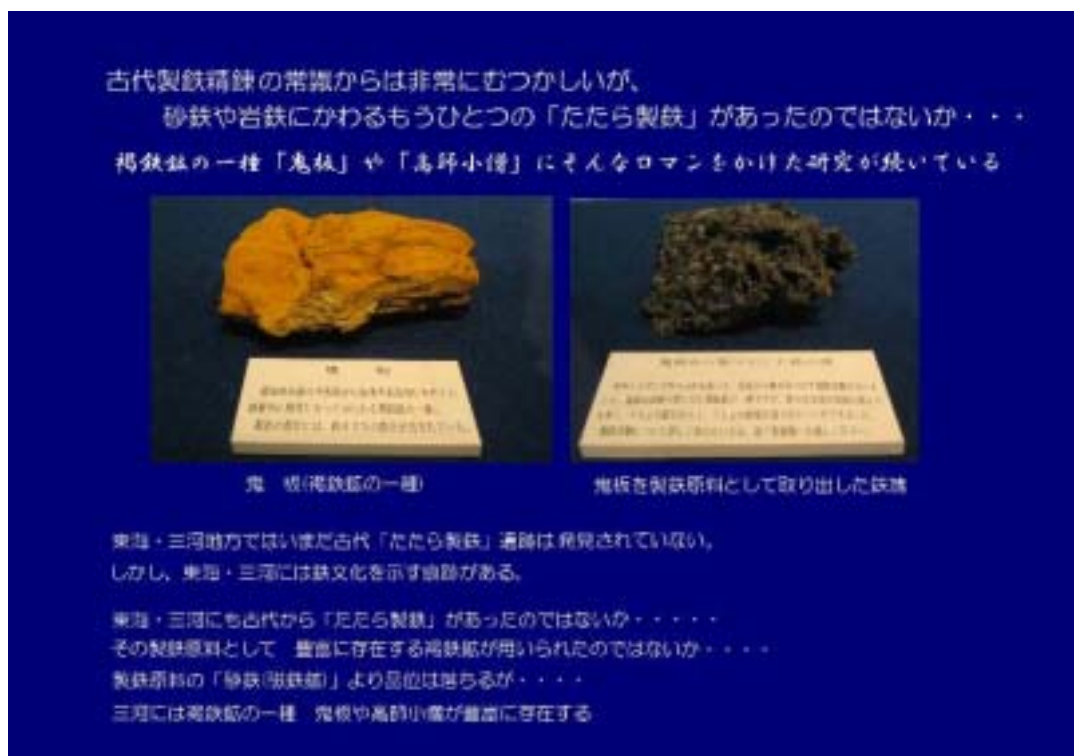
『高師小僧』はこの豊橋市高師が原に典型的にみられるが、昔湿地で芦原が広がっていた日本各地からも出土し、北海道名寄の『名寄高師小僧』や滋賀県日野町別所の『別所高師小僧』などと呼ばれている。また、この『高師小僧』と同種で鉄分が富化した湿地でその底に層状に堆積して出来た『鬼板』と呼ばれる鉄塊もこれらの地帯に埋まっている。

鉄分の多い葦原というと すぐに尾瀬ヶ原 燧ヶ岳山麓の赤田代が頭に浮かびました。奥会津 尾瀬ヶ原の燧ヶ岳の麓 東電小屋や温泉小屋がある周辺には広大な葦の広がる湿原があります。この燧ヶ岳周辺の土には鉄分が多く含まれていて、それが一面に広がる葦原の湿原に流れ込み、それが濃化して少し赤味を帯びると油を流したような帯が水に浮いていて赤田代と呼ばれている。



鉄分の多い湿原 尾瀬ヶ原 赤田代 昔 高師が原も こんな風であったろうか・・・・・・・・

尾瀬に行った時には 尾瀬にも鉄分の多い湿原があるのと思っただけで特別気にも留めなかったのですが、高師が原のイメージも丁度こんな風に葦原が広がっていたに違いないと想像しています。尾瀬が原の赤田代周辺では 湿原の葦の根に今も「高師小僧」が生長し、底には鉄分が堆積しているに違いない。



この『鬼板』や『高師小僧』などは水酸化鉄を主とする褐鉄鉱の一種で鉄分の品位は低く古代のたたら製鉄の原料としては非常に難しいと思うのですが、現実なたたら製鉄法で実用品が具体的に作れる実験が行われているのを知ってびっくり。

思いもかけなかった「たたら製鉄」原料であり、しかも、それが「たたら製鉄」では空白の伊吹山の東に広がる美濃・東海・三河で実際に行われていた可能性を検討している人たちが多くいる。

あまり知らなかったのでビックリしました。

そんな眼でインターネットの中を調べると東海・信州でこれらの褐鉄鉱を使って古代たたら製鉄の可能性を探る検討やこれらを原料としたたたら実験が広く行われているのも知りました。

また「高師小僧」や「鬼板」の眠る豊橋・高師が原台地や天伯・野依台地には鉄と関連する「片目の神」の昔話があるという。

さらに『鬼板』は陶芸の世界では良く知られた顔料で現在でも「鬼板」の名の顔料があり、東海の瀬戸・志野や織部そして信楽・唐津など陶器の下絵には鬼板顔料を溶かした釉で下絵を書き上薬をかけて焼くことでその独特の絵や味わいが得られる。

その時の温度や酸化還元の状態や鉄顔料の配合などで黒褐色から赤褐色まで色々な色に発色し、それぞれの陶器の特徴を形成する。

たたら製鉄と陶芸では「炉」と「窯」と名はちがうが、「1000度を超える高温の炎の中で鉄原料である鉄が酸化・還元の種類々の反応により鉄の状態を変化させ、その証として冷えた時に黒褐色や赤褐色などの色を発色する」

	 <p>参考 鬼板</p> <p>酸化鉄を多く含んだ鉱物で、その形状が鬼瓦に似ていることからその名が付けられたともいわれます。粉末にして水に溶かし素地に絵柄を描き焼成すると黒褐色、赤褐色などに発色</p>
<p>鬼板を用いて縄文土器の彩色実験 茅野市尖石縄文遺跡で</p>	<p>鬼板を用いて製作された種々の陶器とその絵柄 インターネットより</p>

大生産地であった豊橋・吉田鋳物師 知多・常滑大野鋳物師など隆これはまさに鉄精錬と同じである。

そう考えると 東海は有名な陶器の郷 「たたら」の技術が陶芸とともに進化しても不思議でない。東海・美濃・三河にも数多くのたたら関連地名や神社があり、中世農機具の一盛をきわめた鉄の街がある。また、この地方は鉄製の仏像の非常に多く存在する地域でもあるという。

これらの伝統・ルーツをたどってゆけば、

『この「高師小僧」や「鬼板」など身近で手に入る褐鉄鉱を製鉄原料とした

「たたら製鉄」があっても不思議ではない。

砂鉄・餅鉄とならびもうひとつの和鉄原料として「高師小僧・鬼板」があったのではないか ?? 』

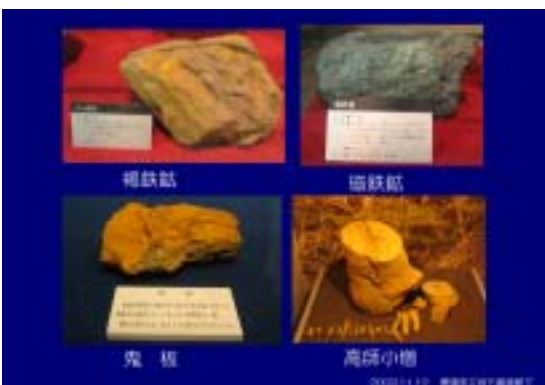
と思えてくる。



中央構造線が走る大地殻変動地帯の上に
 葦が生い茂る広大な湿原があり、その後の隆起で広大な台地になった。
 その地下には湿原時代に堆積した「高師小僧」や「鬼板」などの鉄資源が今も眠る。
 この鉄資源を使って 陶器の上絵が そして 和鉄がつくられたのではないか・・・

そんな「高師小僧」は今も高師が原の台地にあって、
 雨で表面の土が流されると頭をもたげて無数の小僧が土の中から立ち並ぶ。

イメージしただけで楽しくなって、
 11.12. 秋の雨上がり、
 愛知県渥美半島の付け根にある豊橋の高師が原へ「高師小僧」に会いに行ってきました。





第三の和鉄原料?? 「高師小僧」「鬼板」 が眠る 高師が原台地 2003.11.12.

古代製鉄精錬の常識からは非常にむづかしいが、
砂鉄や岩鉄にかわるもうひとつの「たたら製鉄」があったのではないか・・・
褐鉄鉱の一種「鬼板」や「高師小僧」にそんなロマンをかけた研究が続いている



鬼板(褐鉄鉱の一種)



鬼板を製鉄原料として取り出した鉄塊

東海・三河地方ではいまだ古代「たたら製鉄」遺跡は発見されていない。
しかし、東海・三河には鉄文化を示す痕跡がある。

東海・三河にも古代から「たたら製鉄」があったのではないか・・・
その製鉄原料として 豊富に存在する褐鉄鉱が用いられたのではないか・・・
製鉄原料の「砂鉄(磁鉄鉱)」より品位は落ちるが・・・
三河には褐鉄鉱の一種 鬼板や高師小僧が豊富に存在する

11.12. 快晴の早朝 新幹線に飛び乗り、豊橋へ。

神戸に帰って初めての「たたら」を訪ねる旅

高師が原といっても 今はもう住宅地が広がる台地 果たして「高師小僧」にあえるかどうか・・・

地図で調べた「高師台」という地名と「高師小僧」の標本のある豊橋市立地下資源館を訪ねれば何とかなるだろう。

琵琶湖の向こうに比良・蓬莱の山々 そして 伊吹山が快晴の空にそびえて美しい。

これらの山裾には古代たたらの伝説や製鉄遺跡がある和鉄の郷。

山へは幾度もいったものの和鉄の郷として訪ねたことはなく、次は是非行きたいところ

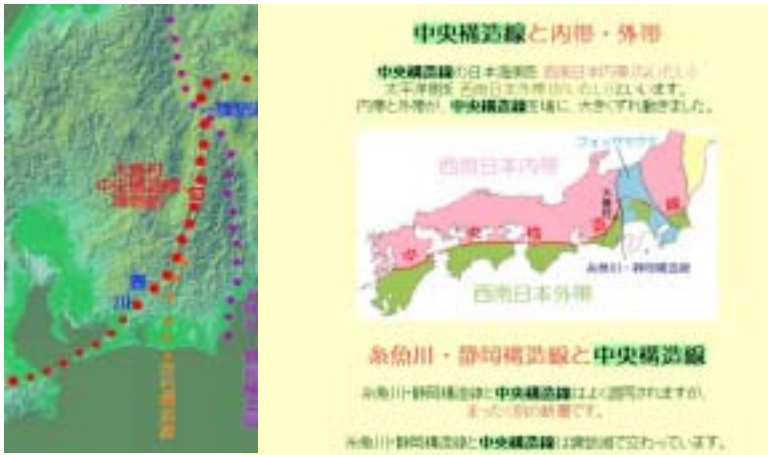
伊吹は近畿・滋賀の山と思っていましたが、今回 高師小僧を調べていて

「意外にも美濃の山 伊吹山の顔は美濃を向いている・・・

その麓に広がる広大な美濃平野にも古代の和鉄の里の顔がある」

かつて 仕事で通った伊吹・金生山の山麓を眺めながら東海へ

名古屋から約 30 分 豊川を渡ると豊橋の駅 豊橋駅から東海道線に乗りかえて東へ一ツ目の二川駅へ
 まずは 二川駅の北にある豊橋市立地下資源館へ行って「高師小僧」の標本と予備知識を仕入れて高師が原
 を訪ねることにする。



地下資源の宝庫 中央構造線と豊橋の位置関係

電車が豊橋を出て市街地が広がる中を東に走り出すと北側から山々が迫り、南には遠く海岸まで、幾つもの丘陵が街と田園の中に埋まっている。

南にこの丘陵を眺めながら一段高い丘の上を東に電車は走り、丁度山裾に迫ったところ二川駅で停まる。

この山々が中央構造線の断層地帯か・・・。
 また ここは東海道の宿場町二川宿。
 海岸方向には住宅地と田圃が点在するのどかな丘陵が広がっている。おそらくはこの丘陵地がかつての高師が原・天伯が原。もう市街地の中に埋もれている。



二川駅南にひろがる丘陵地



山の高台にある豊橋市立地下資源館



【1】豊橋市立地下資源館



二川駅北側の山裾高台に豊橋地下資源館があり、駅の南側一段下の丘陵地には自然博物館 西には豊橋の市街地が広がっている。

かつてこの周辺には中央構造線が走る複雑地形の中に葦原に覆われた湿原が広がり、中央構造線沿いに存在する鉄や種々の金属が水の流れに乗ってこの湿地に流れ込み、沼地として堆積という。

今は全くそんな痕跡も見られないが、中央構造線のすぐそばにある地下資源館がそんな過去を教えてくれる。

地下資源館の入り口をはいるとすぐトンネルになっていて、いかにも地下の坑道に入ってゆく風情。

その途中の壁をくり貫いて その中に「高師小僧」が展示されていました。



豊橋の東南 渥美半島の付け根に広がる広い丘陵地
 地下資源館より 2003.11.12.

予備知識で想像していたよりも大きな径が 30 センチあまりの巨大な「高師小僧」を中央にその下に幾つもの高師小僧。これはもう巨大な根そのもの。

断面には幾つもの輪が見え、幾多の時代を経て成長したことが判る。

センター部の小さな穴がこれら鉄を吸い寄せた葦の跡と言う。にわかには信じがたいが、下に並べて展示されている小さな高師小僧をみると納得できる。でも 鉄というより、まだ 根そのものの感じがする。

おそらく湿原の水位の変化に応じて 何百年もかけて根を中心に年輪のごとく、析出形成されたものであろう。

高師小僧は水酸化鉄の集積した褐鉄鉱の一種の針状鉱。採取した高師小僧の断面を後日 走査電顕で観察した結果からすでに良く知られているごとく針状結晶が絡み合っているのが確認できました。



高 師 小 僧



地下資源館の内部

葦の生い茂る湿原に水と共に流れ込んだ鉄分が葦の根の水分や養分吸収と一緒に根の廻りに吸い寄せられ、そこでバクテリアか何かの作用で根の周りに析出し、成長する。

その繰り返しを何十年・何百年繰り返して こんな大きな「高師小僧」が形成されたのであろう。本当に自然が作った不思議な鉄資源です。

地下資源館には沢山の金属鉱石の標本とともに色々な鉄鉱石が展示されていました。

「高師小僧」と同種の「鬼板」そして たたら製鉄の主原料「砂鉄」を形成する「磁鉄鉱」など それぞれが大きい塊のまま展示されていました。



鬼 板



褐 鉄 鉱



磁 鉄 鉱

また、鬼板を砕いてつくった砂を製鉄原料にたたら製鉄法(実験)で精錬した鉄塊が展示されていました。褐鉄鉱でも 現代の近代製鉄法を使わなくても古代は別としても現在の「たたら製鉄」法で鉄塊が作りうることの証明。

すごいですね。 この地下資源館だけでなく幾つかの実証実験がなされているという。



「鬼板」と「鬼板」を製鉄原料として地下資源館の実験で取り出された鉄塊

「鬼板」はこの三河では砂鉄を探すよりもポピュラーだし、陶器製造の窯にはこの「鬼板」顔料を還元して鉄彩を発色させる技術も身近にある。

「高師小僧」は資源的に無理にしても大量に地下にある「鬼板」を原料として古くからこの褐鉄鉱原料を製鉄原料としてたたら製鉄がやっぱりあったのではないかと考えさせられる鉄塊でした。

課題は鉄分が20%~40%の品位の低さとその低品位を克服する安定した精錬を確保する温度維持と思う。

後世「たたら製鉄」の大量生産に欠かせない発明となったフイゴなどに当たる強い風が得られれば……。東海に隣接した美濃・伊吹には伊吹風という強い風があるという。

この三河では どんな手段で……???

また これの克服のため違った構造の炉があったのでは……??

登り窯の構造での精錬の可能性は……???

決め手はありませんが、見ているだけで楽しいですね。



帰る前に オフィスにうかがい家田館長さんに「高師小僧」「鬼板」について色々教えてもらいました。

やっぱり、豊橋へ帰るより、ここから海岸よりに斜めに行く方が高師が原は近いことまた今は高師台のハイテクセンター用地に造成されたところで今も高師小僧採取できることも……。



地図を片手に位置を教えてもらい、高師が原へ walking

実際 土から顔を出す「高師小僧」を見られるとの確かな報を得て元気出して歩くことにしました。

製鉄伝説「片目の神様」の伝説が残る高師が原と野依・天伯が原そして それら隔てる梅田川

この梅田川沿いを歩いて 約2時間のwalk 本当にお世話になりました。

【2】「高師が原」台地 walk 豊橋市高師台 2003.11.12.

地下資源館から一旦 JR 二川駅に出て、ガードをくぐって駅の南に出るとすぐ東西に流れる「梅田川」の土手にぶつかる。

この川は渥美半島の付け根に向って東に天伯が原・野依の台地 西に高師が原台地を分けながら下って行く。昔々 葦原が広がる大湿地帯の中心部を流れ、この両側の台地には「高師小僧」や「鬼板」が眠る。また「片目の神」の製鉄神伝説の残る「野依」もこの海岸よりにある。この川に沿って行けば ほぼ1時間ちょっとで 自然と高師が原に行き着く。



梅田川 二川駅南付近



海岸部渥美半島の付け根に向う県道 31号線

川を渡ってそのまま南に行くと東西に走る国道1号線。これを少し西へ戻ると南西へ下って行く梅田川の橋に突き当たる。この橋を再度渡ったところで、北に豊橋へ向う国道1号線と別れ、南西の海岸部 渥美半島・伊良湖岬へ向う県道31号線に入り、南西に下って行く。

道は高師台の丘陵地の山裾をまっすぐ海岸へむかい、並行する梅田川は一段下側の田圃の中を流れ、その向うには市街地と田園地帯とが入り混じったのどかな丘陵地が遠望できる。

振り返ると先ほど訪ねた地下資源館を持つ二川宿の山並みが見える。



梅田川に平行して渥美半島の付け根に向う県道31号 高師台リサーチパーク入り口付近

2003.11.12.

今まで見てきた製鉄地帯とはちょっと趣を異にするのどかな田園地帯。

この丘一体が昔は本当に低湿地帯とはにわかに信じがたい。

ここが間違いなく日本を東西に貫く中央構造線の真上だとするとその地殻変動はすごいもので、広大な湿地帯そして隆起と貸す数の変動が起こったろう。

今眺めるポコポコと丘を並べる丘陵地もその痕跡か・・・・・・・・。

1時間弱ほど歩くと教えてもらったリサーチ パークの造成地の入り口入り口に高師台の標識がみえる。

この入り口を西に入って丘を約 500m ほどのぼってゆく。



高師台への入口 と 両側に豊橋リサーチパーク造成地が広がる高師台への道



道の両側には今 新しいリサーチセンターの建物が建ちはじめている。今後 先端技術開発を担う夢を秘めた丘陵である。

この丘陵の上に天然記念物「高師小僧」の指定地高師台中学が建っているのが見える。

高師台中学の手前には教えてもらった造成地が両側に見え、左手に隣接した小さな谷を挟んで高師台中学が建っている。



高師台の丘の上にある高師台中学

このあたりが、「高師小僧」の眠っている場所に間違いはないが、全く標識も看板もない。

ただ、天然記念物の指定地と聞いた中学に隣接した谷には綺麗に整備された公園があるのに網に囲まれ、立ち入り禁止になっていた。 どうもよくわからない。

様子を聞くため 中学と道の反対に建つ高師台地区会館にゆくとその陳列棚に沢山の小さな高師小僧が

並んでいる。すぐ下の造成地で子供達が採ってきたものだという。
 そして、間違いなく このあたり全体が「高師小僧」の出る場所で、その造成地で子供達が高師小僧を探すのだという。



高師中学に隣接したリサーチパーク造成地



今日は雨上がり 表面の土が流されて 高師小僧が頭をもたげているに違いない。

向かいの造成地に足を踏み入ると足元の粘土層の中に石ころと共に無数に散りばめられた棒切れ状のかけらが見える。一つ土から掘り出し、割ってみるとその断面 真ん中に穴とそれを中心に幾重にも層状に描かれた褐色の輪が見える。間違いなく「高師小僧」。

地下資源館で見たものに比べると格段に小さいが、雨で出来た水流れの跡に粘土質の土の中に沢山の高師小僧が頭をのぞかせている。「高師小僧」だとみるからかも知れないが、実に美しい土模様となっている。



リサーチパーク造成地に顔を出した「高師小僧」 2003.11.12.

約1時間ばかり、造成地の地面を見ながら歩き回って 大きそうな高師小僧 約10個ほど採取。大きいといっても約1センチ弱の径 長さ数センチの小さなものばかりですが……

ぎゅっと曲げるとすぐ割れて 断面の輪模様が見える。リュックから磁石を取り出し手見ましたが、やっぱりくっつかず。ぼろぼろの細かい鉄さびが棒状にこびりついているといったところか……また これら棒状の「高師小僧」と共に1センチ弱の小さい粒塊の褐色の粒も沢山見える。おそらく「鬼板」が細かく砕けたものであろう。





この造成地の切り通しの斜面には褐色の褐鉄鉱層が露出して見えている。

この丘のあちこちでこんな状況だとするとこの台地の下には大量の褐鉄鉱が堆積していることだろう。

今 まだ 少数の人達の提案として検討が進んでいる通りこの「鬼板」や「高師小僧」が古代の製鉄原料として使えたなら、この地に伝わる伝承どおり、東海の製鉄地帯となつたろう。

いつかわからないが、この地のどこかから、忽然と製鉄遺跡があらわれるかもしれぬ。

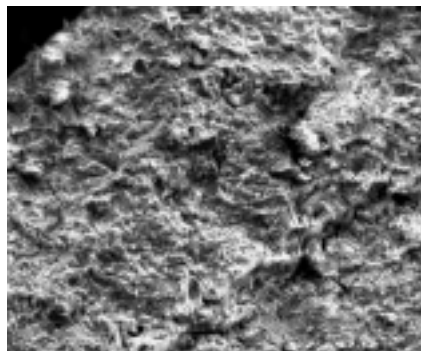
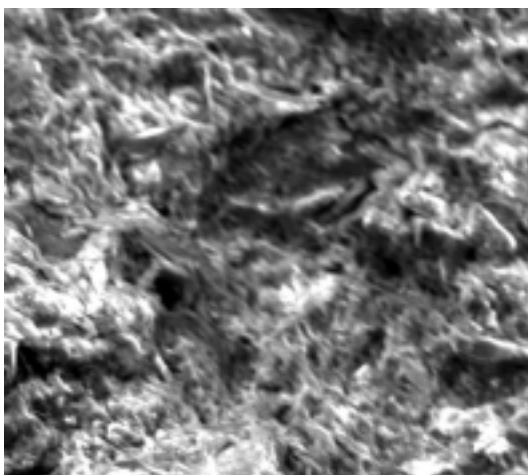
「高師小僧」はそれを待ちわびて 雨上がりにそっと頭をもちあげているのかもしれない。

12.3. 高師台の葦原に育った「高師小僧」の電顕拡大写真



「高師小僧」も昔々こんなところでそだったのか・・・???

鉄分を含んだ葦原の湿原の一つ 尾瀬が原 赤田代



「高師小僧」の断面の破面走査電顕写真 豊橋市高師台で採取
少しピントぼけていますが、高師小僧が針状結晶の集積であるのが見えます

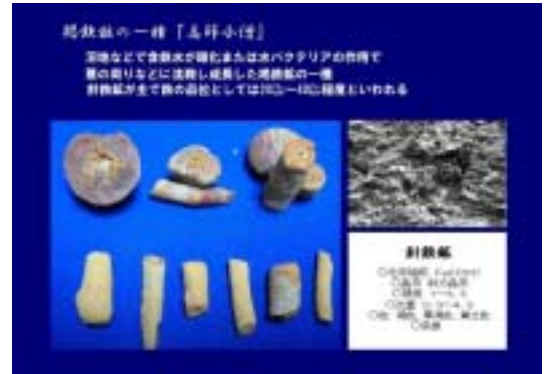
2003.11.12.

12.4. 「野依の神様」

豊橋のむかし話 ** 豊橋の片目神伝説 **

豊橋市立中学校国語研究部会 編より

<http://village.infoweb.ne.jp/~fwif4861/2001-9-19takasi.htm> より採取



***** 野依に伝わる神の話 *****

梅田川は、豊橋市の南部を東から西へ流れる大河で、その源を遠く遠江に発し三河湾に流れ込んでいる。この川の流域に、野依と高師の郷がある。

いつのころからか、この梅田川をはさんで、野依の神様と、高師の神様が住むようになった。両隣に住みついたこの二人の神様は、仲の良い平和な毎日を過ごしていた。

ところがある日のこと、日ごろ仲の良かったこの二人の神様は、どうしたことが、ちょっとしたことでけんかを始めてしまった。どちらが勝つとも負けるともわからない大げんかがしばらく続いた。

一瞬、高師の神様が、何を思ったのか急に走り出し、近くにあったヤマモモの枝を一本ぼきりと折ってもどってきた。野依の神様のほうは、この様子をぼかんと見ていた。

高師の神様は、野依の神様の不意をついて、その枝をおもいきり野依の神様めがけて投げつけたのである。

ヤマモモの枝は、すごい勢いで飛んできて、よける暇もなく野依の神様の目に突きささった。

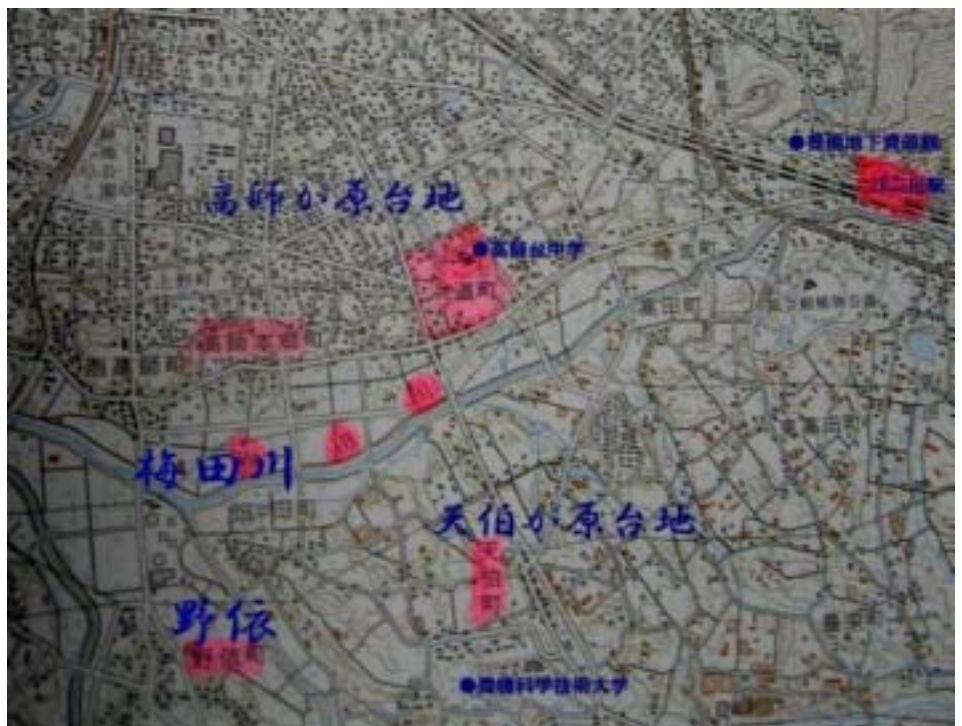
その枝の突きささった目からは、とめどもなく血が出て、たちまち顔中が真っ赤になり、衣服にも容赦なくしたたり落ちた。激痛の中で野依の神様は、突きささったその枝を抜きとり、目をおさえながらも、自分の家にひきあげていった。

野依の神様の目の傷は、数日たってもなかなかおらず、ついには片目が見えなくなってしまった。

独眼になった野依の神様は、そのため、高師の神様を非常に憎むようになり、隣どうしでありながら以後、口もきかず、何をするにも、いっしょにはやらなくなってしまったという。

高師の神様のなげたヤマモモの枝がもとで野依の神様は失明したので、野依で生まれた氏は、右目か左目かどちらかが、やや小さく不ぞろいであるという。このヤマモモの事件以来、野依の神様はこの木がどうにも嫌いになってしまい、村にはヤマモモの木一本たりとも育たないようにしてしまったという。

また、仲が悪くなった高師とは、今までに縁組のまとまったことがないらしい。



こ の 話 の 原 典

豊田珍比古氏 採集

「郷土随筆 三河百話」「伝えたい郷土の伝説」より

豊橋市野依町では昔、神様が高師の神様と喧嘩しての帰りに道端の楊梅（やまもも）の枝で目を突いたので、それ以来この村には楊梅が一本もなくなつた。

昔それを植ると、その家は潰れる。
お祭も一方が天気なら一方は雨がふる。
両村の間では縁組もしないことになっている。



上記のような「片目の神」伝承が豊橋の南東に広がる高師・天伯・野依の台地に伝わっている。

このような「片目の神」伝説は古代の鍛冶神と関連した坂鉄の民にまつわる伝承とみられる。この伝承のある梅田川を挟む野依・天伯台地と高師台地は「既にお話したごとく「高師小僧」「鬼板」などの鉄資源が眠る台地であり、この台地に産鉄の民がこり鉄資源を原料として活動していた可能性を考えても不思議でない。

この地方では 古代たたら精錬の遺跡はまだ見つかってはいないが、上記伝承を含め 多くの伝承が残っており、かつ「鬼板」「高師小僧」など大量の鉄資源が埋蔵されており、いつの日にか この地での産鉄の民の活動 古代和鉄精錬のベールが解き明かされるかも知れない。その時には 「高師小僧」もその製鐵原料として 桧舞台に立つでしょう。

「高師小僧」の言葉が三河・東海地方でこんなに広がっていくとは思ってもよらぬ事 でも この地にしっかりとした産鉄の民の痕跡がある。

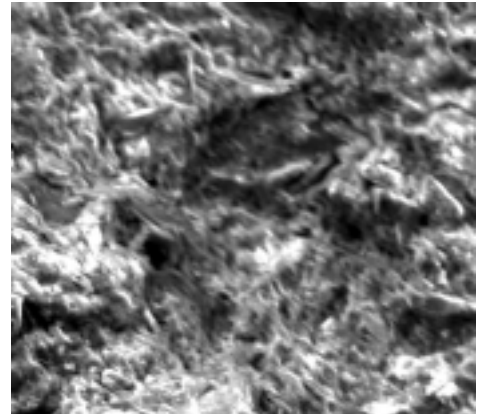
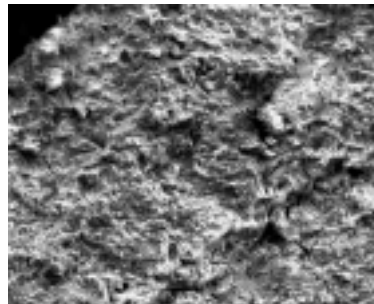
12.5. 「高師小僧」 総括

「高師小僧」の名前にひかれて 豊橋高師が原に出かけたのですが、全く思いもしなかった現地に立ち並ぶ「高師小僧」に出会えました。 やっぱり出かけてきて良かった。

どこにでも転がっている木の根の端くれにしか見えないが、割ってみるとそこには幾重にもきざまれた褐色の輪が見え、中央には生きていた証拠の穴がある。

そんな「高師小僧」が雨上がりの土の中で顔をもたげて立ち並んでいる。実に美しい姿でした。

後日採取した「高師小僧」を走査電子顕微鏡でのぞくと間違いなく針状の組織が絡み合って形成されているが見えました。古い時代に何年もかけて葦がその根元で作り上げた網目構造の鉄パイプ それが「高師小僧」の正体でした。



「高師小僧」の断面の破面走査電顕写真 豊橋市高師台で採取 2003.11.12.
少しピントぼけていますが、高師小僧が針状結晶の集積であるのが見えます

「高師小僧」や「鬼板」が本当に古代からたたら製鉄に使われたとの確証はないが、その不思議な風貌とともに この東海の地で光り輝いた時代のロマンを秘めて、砂鉄 餅鉄に続く第三の和鉄原料の候補としてノミネート。

本当にこの東海・三河では砂鉄精錬とは違った和鉄製造がいきづいていたのだろうか・・・
いつの日か そのペールがはがされるとき
「高師小僧」もまた立ち並んで桜舞台に立つかも・・・

名古屋への電車の中 何度も何度も採取した「高師小僧」を取り出しながら、夢をふくらませて一人悦にいました。名古屋に着いたのが 午後3時。

東海でもう一つ訪ねたかった伊吹山の麓 美濃の地 大垣・垂井・伊吹を歩きたく垂井で途中下車して帰りました。

この地も製鉄遺跡はないが、製鉄伝説のある地であり、ここもまた、褐鉄鉱が製鉄原料として使われたのではないかと提案されている地でもある。この地については伊吹山山麓として別途まとめたい。

2003.11.12.夜 真っ暗な近江路を走る快速電車の中で

再度「高師小僧」を取り出しながら

Mutsu Nakanishi

